Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University
Journal of the Graduate School of Asia-Pacific Studies
No. 24（2012. 10）pp.161-180

婦人論にみる石橋湛山の思想と哲学についての一考察

後出 博子*

An examination of essays on women by Ishibashi Tanzan（1884～1973）

Hiroko Nochiide*

Abstract

Ishibashi Tanzan started his career as a journalist working at Toyokeizaishinposha(東洋経済新報社), which was known to its radical opinion. He wrote essays on diverse topics, but he gradually concerned about politics and economy of the country. His essays on women were scarcely written after he became the editor of the magazine（『東洋経済新報』). After the world war Ⅱ, he became a politician pursuing his philosophy ever unchanging

Looking into the essays on women written by Ishibashi Tanzan, we could learn Tanzan's thoughts and philosophy deeply rooted in his personality, which is worth revaluating. This paper explores Tanzan's essays dealing with women's situation in the society, which was put behind in the late Meiji and Taisho era. Tanzan, as one of the prominent democrats at the time, intended to change Japan's feudal thoughts and habits. He believed that they would be difficult to be shed off but they were critical factors to develop Japanese society. Tanzan opposed to women's educational policy（良妻賢母主義, good mother good wife）by the authorities, criticizing that it would not emancipate women from feudalistic idea on women. On the other hand, the awareness by women themselves occurred when *Seito*（『青鞜』）was issued by Hiratuka Raicyou（平塚雷鳥）in the democratic movements so called Taisho Democracy. As one of the democrats, Tanzan demonstrated his ideas through essays and nature individualism among man and woman to materialize free society and create its citizen.

In the first half of this paper, it's examined the influence of Tanzan's personal background and his teachers on his philosophy. In the second half it's discussed on his essays about women, examining how Tanzan expressed his thoughts on democracy. Thus, his 33 essays on women will be analyzed in this paper, so that we can approach to his revolutionary thoughts to women's role in Taisho Democracy.

Keywords: Taisyo Democracy（大正デモクラシー）, ryosaikenbo（良妻賢母）, *Seito*（『青鞜』）, individualism（個人主義）

* 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士後期課程；Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University, Doctoral Degree Program

はじめに

石橋湛山（1884〜1973）は、近代日本にとって稀有な言論人であり、早稲田大学が誇る逸材である。湛山が残した膨大な量の評論は、生前、東洋経済新報社から『石橋湛山全集』全 15 巻として刊行された。湛山は、早稲田大学哲学科を卒業後、当時、急進的自由主義の旗手であった東洋経済新報社に入社し、植松考昭、三浦銕太郎らとともに言論活動で大正デモクラシーの一翼を担った。湛山が残した「婦人論」[1]もその一環である。

本稿は、湛山の評論のなかの婦人論に焦点を当て、彼の婦人論の「独自性」を明らかにする。①なぜ、湛山の婦人論なのか。②湛山の良妻賢母主義批判はなぜか。③「新しい女」の登場と女性自身の変化をどのように評価していたか。④湛山の理想の女性像はどのようなものか。これらの課題を湛山の婦人論を整理、分析することで明示する。

日本近代史、湛山研究の第一人者である松尾尊兊は、大正デモクラシーを「帝国主義段階における明治憲法体制に対する人民の民主化運動」[2]と定義している。当時の自由主義者たちは、政治的・市民的自由獲得を目指して、一般大衆に訴え、世論をリードするべく多くの論評を発表した。湛山が言論人として評論を書き始めたのは、経済評論誌『東洋経済新報』の姉妹版月刊誌『東洋時論』であるが、松尾はこの雑誌の特色を「立憲政治の基礎としての市民的自由の擁護と個人主義の鼓吹」にあり、「個人主義に矛盾する一切の旧道徳、すなわち忠君愛国主義や家族道徳を否定し、とくに婦人の覚醒を支持し」と述べている[3]。

湛山の評論は総じて政治・経済・外交を扱ったものが主流であるが、婦人論も含め、初期のものは思想的・哲学的なものが多い。それらに共通するのは、人間尊重に基づいた個人主義である。湛山は、婦人論を通じて個人主義の涵養を訴え、精神の近代化を意図した。

それは具体的にどのような論評となったか。個人主義に相いれないとして、当時の女子教育の主流であった良妻賢母主義を鋭く批判した点に注目する。湛山の良妻賢母主義批判は、婦人論の核心であると考えるが、どのように良妻賢母主義批判を展開したか、湛山の本意とともに分析する。

大正デモクラシー期は、平塚雷鳥や与謝野晶子らが登場し、女性たちが自ら改革を目指した時代である。女性の地位や職業、恋愛と家庭生活など、彼女たちを取り巻く問題を自ら語り始めた。湛山がそうした新しい女性たちの動きをどのように受け止め、評価したかも興味深い課題である。

湛山の自由主義、個人主義の思想形成は、生育環境と教育に拠るところが大きい。湛山は男女の性差による差別は勿論、旧来の偏見や慣習に対する改革者であった。言論人としての湛山は、

---

1 用語の問題として、「婦人論」か「女性論」を使うか、議論の余地があるが、湛山は『全集』でみる限り、「婦人」（あるいは「女子」）を使用し、「女性」と記していない。用語の統一を図るべきだが、近代日本において一般的に使われた女性の呼称が、「婦人」から「女性」へと漸次変化したことを考慮すると、議論が煩雑になるので本稿では厳密に区別しない。湛山が『全集』で使う「婦人」を現代では一般的な「女性」と読み替えても特段の不都合はないとし、基本的には「婦人」「婦人論」を採用する。
補足：女性史ではいくつもの著書がある鹿野政直は、「近代化のなかで、自称としての「女性」が浮上した」と述べている。さらに、「負の価値への開き直りの姿勢があり、その先頭に平塚雷鳥の「元始女性は太陽であった」と宣言したと、解説する（『婦人・女性・女』岩波書店、1989、10〜11 頁）。対語のない「婦人」ではなく、「男性」に対峙する存在を強調するとき「女性」と自称したものである。しかし、湛山が婦人論を書いた 1920 年代頃は一般的な用語として「婦人」が使われ、現代の「女性」に相当するとここでは定義しておきたい。

2 松尾尊兊『大正デモクラシーの群像』岩波書店、1990、2 頁。

3 同上、295 頁。

常に海外からの情報や新しい文献に接し、世界的な視野で婦人論を展開している。また、経済専門家としての立場から女性の経済的自立の意義を全面に出した。湛山は、女性が社会的活動の場を広げ、男性と同じ立場で社会の一員となることが国家繁栄への道であるとする。そうした大局に立って婦人論を展開した。湛山の理想の女性像を想定したい。

先行研究

石橋湛山の先行研究は、彼の経済論、政治論、外交論が主流であるが、研究者の多くが湛山の思想的側面に言及していることからも分かるように、湛山の思想哲学はあらゆる言論活動の基底をなし、時代を超えて一貫した姿勢は高く評価されている。女性論と女性問題に特化した研究は少ないが、思想・社会評論の中の一部として研究されたものはいくつかある。丸岡秀子の「石橋湛山氏の女性論について」(『自由思想』34 号)、上田博の「石橋湛山の女性論―市川房枝との出会い』(『自由思想』69 号)、同『文芸・社会評論時代　石橋湛山』(三一書房、1991) などがある。上田美加の『石橋湛山論　言論と行動』(吉川弘文館、2012) が湛山研究として最新のものであるが、女性論への言及はない。

丸岡秀子は女性問題の専門家、フェミニストの立場で、『婦人思想形成ノート　(上)(下)』の著書として知られる。丸岡は、湛山の婦人論を高く評価していて「福沢諭吉に続く近代主義の典型的発現として、その系列の中で高く位置づけられなければならぬ」といい、女性の「人権的立場、差別なき平等の立場、さらに社会参加における男女平等の立場であり、・・・儒教的良妻賢母主義との対決」という湛山の主張を評価した。丸岡論文は、女性の権利意識に限定的であり、湛山の目指すところとやや異なる。湛山は、社会の中で特に立ち遅れた「意識」の改革を求め、男女ともに「個人」としての精神的な自立が肝要であると訴えたのであった。また、経済人としての視点で女性の地位改善、社会的活動への参加を提言した。

上田博は立命館大学文学部の教授であり、文芸・社会評論に多くの研究がある。湛山の女性論もその流れの中で分析している。女性運動の先駆けである市川房枝が経済専門家としての湛山を頼ったこと、湛山も「婦人経済研究会」へ協力を惜しまなかった事実に触れている。

海外の研究者では、アメリカ人シャロン・ノルティ[4]が湛山を取り上げている。日本近代史を研究するノルティは、日本のリベラリズムの流れの中で湛山を論じた。大正期のフェミニズム論争をとりあげ、当時の自然主義の女性観や、青鞜社を立ち上げて日本でのフェミニズムの先駆的存在となった平塚雷鳥に言及する。当時、進歩的とされた言論人・湛山とその師・田中王堂の女性観をリベラリズムの中に位置づけた。ノルテェイは、一方で湛山が個人の解放の延長線上で婦人の解放を論じる限界を指摘し、女性が抱える諸問題に対して現実的な解決に至っていないとする。フェミニズム先進国としての視点は鋭く、日本の根深い「家族主義」から脱却できない日本人の意識構造が日本のフェミニズムの壁として浮かび上がる。湛山の「婦人論」を論じた海外の文献では唯一のものである。

姜克実(『石橋湛山の思想史的研究』早稲田大学出版部、1993) と長幸男(『石橋湛山－人と思

4 Sharon H.Nolte, 1948 年生まれ。DePauw 大学助教授として日本史を専攻。東京大学に在籍し研究をまとめたものが、*Liberarism in Modern Japan, Ishibashi Tanzan and His Teachers*, 1905-1960(近代日本のリベラリズム－石橋湛山とその先師たち) 山口正の書評がある。

想』東洋経済新報社 1974）も湛山の思想研究の一部として、女性論に触れている。共に経済学者であり、女性と職業について論じている。姜は「職業婦人論」で「湛山は、口先だけの職業婦人論者でなく、この論を華やかに展開・・・小学校教師を務めた岩井うめを妻として迎え、自らの行動を持って世間の職業婦人蔑視の観念と闘った」[5]と指摘したが、これはやや大袈裟である。うめ夫人は、結婚後は退職し、家庭で 3 人の子供の教育に専念している。湛山の個人的な生活が、職業婦人の地位向上の実践であったとは言い難い。しかし、「湛山の思想をもっともよくあらわすのが婦人問題の扱い」[6]であるとの指摘に疑問の余地はない。

研究方法と本稿の構成

基礎資料として、東洋経済新報社から出版された『石橋湛山全集』全 15 巻に掲載された、婦人論と婦人問題[7]に関わりのある評論を選んで分析対象とした。石橋湛山は稀にみる膨大な著作を遺した。『全集』はその多くを網羅しているが、『全集』に未収録のものは『自由思想』や『早稲田文学』にあり、それらも利用した。湛山自身の『湛山回想』も、研究対象として重要である。基礎資料を補足するために、山梨県甲府市にある、「山梨平和ミュージアム」（石橋湛山記念館）[8]を訪ね、湛山の母校の甲府一高の元教師であり、記念館の理事である浅川保に面会した。浅川の研究した『校友会雑誌』について直接多くの示唆を得た。記念館（石橋湛山記念館）は、郷土史研究の一環として積極的に活動している。東洋経済新報社で、湛山全集の発刊に携わった、山口正からは全集未収録の評論のコピーを入手した。また、湛山の記者時代の具体的なイメージや、全集刊行の際の様子なども参考になった。同じく、東洋経済新報社元社長、神尾昭男からは甲府市で開かれたシンポジウム[9]に出席した折に、『東洋経済新報』の創刊から今日までの様子や新報社の社風など興味深い話があった。

本稿の構成は、1．婦人論を掲載した『東洋時論』『東洋経済新報』について、2．湛山の思想形成、3．婦人論のテーマ別分類、4．湛山の婦人論と個人主義の哲学、とする。

1．東洋経済新報社と『東洋時論』

石橋湛山は 1908 年（明治 41 年）東京毎日新聞社に入社、翌年に退社して兵役後の 1911 年から東洋経済新報社に入った。　以後、政界に入るまでの 35 年間を新報社の記者、主幹、取締役として職責を果たし、一貫して自由主義の論客であり続けた。『東洋時論』（以下『時論』）は、日露戦争後の変動の時代に、新しい視点から政治・社会・思想問題を提起し、且つ経済問題を専門とする『東洋経済新報』（以下『新報』）を補完すべく、新報社の植松主幹と三浦副主幹によって 1910 年に創刊された月刊誌である。東洋経済新報社は当時の風潮の中でも急進的自由主義の論調で知られ、記者として入社した湛山の仕事は、①『時論』において、立憲政治を擁護する新

5　姜克実『石橋湛山の思想的研究』早稲田大学出版部、1993、45 頁。
6　松尾、前掲。
7　用語の問題として、「婦人」か「女性」を使うか、議論の余地があると思うが、『全集』にある「婦人」は、そのまま「婦人論」「婦人問題」とする。
8　山梨平和ミュージアム（石橋湛山記念館）の所在地。〒400-0862　甲府市朝気 1－1－30
9　石橋湛山生誕 125 年記念シンポジウム　2009 年 10 月 18 日、甲府市男女共同参画推進センター「ぴゅあ総合」にて開催。

報社の立場で市民の自由、個人主義を広めること。②次第に露骨になった自然主義や社会主義に対する国家の干渉、圧迫を非難すること。③婦人論も旧来の家族制度や道徳から女性を解放し、個人としての覚醒を促し、同時に社会の伝統的な女性観を変革しようとするものであった。しかし、『時論』は硬質な論調で売れ行きが伸びず、2年ほどで廃刊となり、湛山は『新報』に経済記者として経済・政治・外交論を執筆した。とはいえ、大正デモクラシー期に、社会・文明批評誌『時論』が言論人湛山の出発点であったことに変わりない。

明治43年5月に創刊されたこの『東洋時論』の内容は興味深いものがある。婦人問題も当初から取り上げられている。内容を見ると、論壇、史伝、翻訳集、時論、雑録の各欄に分けられ、論壇では、大隈重信（「現代社会の低気圧」）、阿部磯雄（「婦人の覚醒」）、三浦銕太郎（「青年就職難の恐怖」）があり、史伝では植松が「維新革命史」を連載している。また時論欄では、浮田和民（「学制改革の根本問題」）、文部次官岡田良平（「英国式大学と大陸式大学」）、慶応義塾大学学長鎌田栄吉（「女子教育の目的」）があり、雑録欄には、深甫の筆名で片山潜が書いた（「最近の英国総選挙の活劇と婦人」）も掲載されている。『時論』は当時の教育、社会、青少年、婦人、家庭問題など多岐にわたる問題を取り上げていた。

湛山は、『時論』に社会評論を書くことで、広く社会・文化批判をすることに加え、新しい思想を紹介した。自由な市民社会の実現を目指す新報社にとって、市民の啓発が政治論の前提であったからである。婦人問題に関連する評論は、『石橋湛山全集』に収録されたものうち、初期の著作を集めた第一巻、第二巻に集中している。

2．湛山の思想形成

湛山に影響を与えたのは、①日蓮宗の高僧であった実父湛誓、養父望月日謙　②中学時代に出会った甲府一校の大島正健校長　③早稲田大学の恩師田中王堂である。湛山が、権力や封建的な社会通念に抗し、差別や偏見からの解放を訴えるようになるのは、その教育に原点があった。

湛山の父湛誓（後に日布）は山梨県出身、日蓮宗大学（現・立正大学）学長を経て、身延山久遠寺第81世法主となった高僧である。厳格な父からは、6歳の時にすでに漢籍を教えられた。しかし、湛山の少年期に最も影響を与えたのは、預け親となった望月日謙である。湛山は、日謙について「やかましく小言もいうが、同時にまた春風のごときところがあって、何人にも親しみ易い感じを与えた」人と『回想』に書いた[10]。湛山が山梨県巨摩郡鏡中条村の長遠寺住職望月日謙に預けられたのは1894年（明治27年）、尋常高等小学校高等科2年生の時である。翌年4月に甲府市尋常中学校に入学、同年、日謙の元で得度した。湛山が日謙に預けられていたのは中学を卒業するまでの8年間であるが、その間に父母に会ったのはたった一度だけで、父母との交通は全く絶った。中学時代の湛山についての研究は、元山梨甲府第一高等学校の教諭で、現在石橋湛山記念館理事の浅川保がその著『偉大な言論人石橋湛山』[11]で詳しく述べている。浅川は、湛山の母校、今の甲府第一高等学校（当時の甲府尋常中学、後に山梨県立第一中学校と改称）の教諭を務めていた時、百周年記念資料室に保存されていた『校友会雑誌』を発掘し、以来湛山研究

10『全集』15巻、『湛山回想』（以下、『回想』とする）、10頁。
11 浅川保、『偉大な言論人－石橋湛山』山梨日日新聞社、2008。

を続けている。湛山は、中学在学中に学術部理事として活躍、『校友会雑誌』にも多くの記事を寄稿した。彼の関心は、その記事内容から、中学時代から政治経済、哲学、宗教、教育へと多岐に亘っていたことが分かる。湛山は、仏教批判を書くが、日蓮上人に心酔していた。国を思う青年湛山の志は日蓮に通じていた。日蓮上人はその著『開目鈔』に「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん、等とちかひ願、やぶるべからず。」[12]と書いた。湛山はこれを座右の銘にしている。また、日本の教育にも当時から関心が高く、女性にたいする教育差別を指摘したものもある。

望月日謙の元で過ごした中学時代は、寺での厳しい修行と同時に、掃除から食事の給仕、接客まで、日常生活のすべてを躾られた。そうした親元を離れた生活の中から、自立の精神を体得したものと思われる。中学時代湛山に影響を与えたのが、大島正健である。彼は 1901 年（明治 34 年）から 1914 年（大正 3 年）まで山梨県立第一中学校校長を務めた。湛山は大島を通じて、中学時代にプロテスタント・キリスト教に触れ、西欧知識の体系を学んだ。熱心なキリスト教徒であった大島は、その師であるクラーク博士の教育理念を自らの教育方針としていた。クラークについて「真の教師とは、かくあるものかと感動した」、また「クラーク博士になりたい」とまで思ったというのである。湛山はクラークの博士の感化を「わたしの一生を支配する影響であった」といい、「Be Gentleman!」と「Boys be ambitious!」のクラーク博士の有名な言葉を好んだ。

湛山は大島校長を「からだこそ小さかったが、物にこだわらず、意気の盛んな、豪傑はだの人」とその印象を述べ、クラーク博士と大島を重ね合わせる。大島の人間的な魅力と教育者としての指導力が生徒たちを引き付けたことも記されている。大島が湛山の学ぶ中学へ赴任したのは 1901 年 3 月であるから、湛山が大島校長から直接薫陶を受けたのはわずか 1 年である。しかし、校長への思いを「その一年間に、いまだかつて知らざる強き感銘を受けた。其の感銘は私の一生を支配した」[13]と甲府中学の同窓会誌で述べている。大島校長の人物像は出身地海老名市編纂の『大島正健　生涯の軌跡』に詳しい。大島は、ウイリアム・クラーク博士から直接学んだ札幌農学校第一回卒業生である。卒業後、札幌の母校で英語を教える教師となり、音韻学の学位を持つ気鋭の言論学者、教育者であった。彼はまた、熱心なキリスト教徒として、札幌に最初の教会を作り牧師を務めた人物である。以下は大島校長が生徒に与えた「処世訓」[14]で、大島校長の人となりがよく出ている。

> 理想は高きを要し、職業は低きを厭うべからず。ひとは独立独歩の行為を尊ぶ。・・・苟くも、身の独立を助け、世の公益に進むに、力与うる業ありとせば、その職の如何に関せず、元その道に尊卑の別あるべきことなし。鍬を執る者も剣を提ぐる者も、机に拠る者も庁に坐する者も、共に均しく世界の進歩に貢献す。その一種を欠くも、社会はこれがために円満の発達を期すること能わず。且つ、労働は神聖なり。人は空手の意志て坐食すべき者に非ず。・・・理想己に高ければ、その人亦尚し。境遇は常に時と共に変化す。人はその変化に随って、またその位置を転ずることを得。此の時に当たり、手に職業あるものは、

12 東洋経済新報社『石橋湛山写真譜』より。湛山が書いた日蓮「開目鈔」の一節。
13 前掲、浅川、31 頁。
14『校友会雑誌』第 4 号、1901 年、12 月、山梨県立図書館蔵

恐るる所なくして、猛進することを得るなり。・・・労働は決して愧ずべきものに非ず。青年有為の士、宜しく偏に労働を重んずべし。

この大島の言葉は、キリスト教プロテスタンティズムの職業倫理を教えたもので、同時に、自己の良心に従って自立独立する大切さも強調されている。湛山は、職業への貴賤のないこと、労働の大切さを学んだ。さらに、キリスト教の精神である人類愛と西洋の民主主義の精神は、大島からの教育であった。

人間湛山を形成したものは、一つは幼い頃からの日蓮宗による宗教的な環境と、青年時代に学んだキリスト教を通じた西洋精神文化といえる。東洋経済新報社で『湛山全集』の編集にあたった山口正は、「湛山の宗教観にはセクト主義に拠らない普遍的な真理や実践を重んずる汎宗教的な精神がある」と話す[15]。また、山口が強調したのは、後年「有髪の僧」といわれるほど「私利私欲のない人柄」と湛山を評した。

田中王堂（喜一）も湛山の思想形成に大きな影響を与えた人物である。王堂は湛山の個人主義の理論づけしたといえる。明治 38 年早稲田大学哲学科の学生となった湛山は倫理学の教師をしていた王堂と出会う。王堂は、当時はまだ無名の教師であったが、明治 40 年代から大正年代にはその独創的な文明批評で注目された。

王堂の倫理学の講義は、それまでのヨーロッパからの形而上学的哲学ではなく、アメリカ的な機能心理学に拠るプラグマティックなものであった。王堂はシカゴ大学在学当時、20 世紀シカゴ機能心理学派の中心的な存在であった、ジョン・デューイ（J.Dewey, 1859-1952）と出会い、個人的なサポートを受けたことが知られている[16]。20 世紀初頭のアメリカは、急激な産業化によって生じた様々な問題が顕在化し、伝統的価値観や社会構造からの脱却に活路を見出そうとしていた。日本でも、明治以来の近代化・産業重視からの矛盾が認識された時代であったことから、共通の課題と受け止められた。王堂の最大の関心も日本の改革であった。シカゴ派のプラグマティズムは、伝統的な哲学の二元論に挑戦し、人間活動は精神と実体が不可分であるとして、従来のドイツ流観念論哲学とは異質な人間行動哲学を目指した。そうした新しい哲学を体得して帰国した王堂が、実用主義的哲学、認識論を日本的なものに「翻訳」し、さらに独自に確立したのが「徹底個人主義」である。王堂は社会を離れて人間活動はあり得ないと考え、人間活動の一元論を主張した[17]。明治以来の政治が官僚支配・エリート主義の硬直した社会を現出したとして、学生たちの改革への意識が高揚していた時期である。因習打破と制度の改革がなければ真の市民社会は実現できないと主張する王堂の哲学は、時代批判として受け入れられ支持された。湛山も王堂に感化された学生の一人として、王堂を生涯師と仰いだ。学閥のない、異端の学者として当時のアカデミックな世界では決して恵まれた生涯ではなかった王堂だが、多くの弟子に愛されその哲学は引き継がれた。姜克実は、王堂哲学の唯一の目的は「哲学を持って社会を改造し、社会生

15 山口正は「世界宗教」序論を書いた湛山を「セクトによらない」高い宗教的な精神性を強調していた。
16 Nolte,S（シャロン・ノルティ）の論文（『自由思想』33 号、152 頁。英文のまま掲載。タイトルは‘Tanaka Odo, John Dewey, and Ishibashi Tanzan’）。ノルティによると、当時のシカゴ大学は最も創造的な知的環境で、王堂がその研究者と直接であっていることを「幸運」であったと述べている。
17 姜克実「田中王堂－相対的自由思想家・明治末年を中心に」『自由思想』50、1989、43 頁。

活における個人の活動を自由にし、充実させること」と指摘する。

> 「王堂哲学」は人生中心の哲学、個人本位の哲学、そして漸進主義の哲学であった。それは明治30年代の個人主義、自由主義の喚起、国家主義、儒教主義を唱える「国民道徳論」の批判に進歩的意義を持つことはいうまでもない。が、それよりもっと大切なのは、かれの作用主義哲学、倫理、社会観の影響のもと、石橋湛山と東洋経済新報周辺の「新自由主義者」の一派が生まれ、大正、昭和初期の社会改造の実践中、極めてユニークな、且つ歴史的影響を後世に残したことである[18]。

石橋湛山の評論は、王堂哲学の実践であった。湛山の「婦人論」は、この社会改革への試みの一環であった。

3．婦人論のテーマ別分類

婦人論テーマを、（1）良妻賢母主義批判と女子教育　（2）『青鞜』と「新しいおんな」（3）女性の地位、職業論　（4）女子教育と個人主義　（5）結婚、離婚、家庭生活　（6）その他、に分類した。（テーマの分類は便宜的なもので、内容の重複もある）

（1）良妻賢母批判と女子教育

①「吉田熊次氏の『女子研究』を評す」明治45年1月『東洋時論』（『全集』第1巻246頁）
②「吉田熊次氏の答弁を読む」明治45年3月『東洋時論』（同、260）
③「日本の女子教育」大正元年9月『東洋時論』（同、297）
④「維新後婦人に対する観念の変遷」大正元年10月『東洋時論』（同、298）
⑤「婦人解放の第一歩」大正4年1月『東洋経済新報（『全集』第2巻、471）

石橋湛山は④の評論「維新後婦人に対する観念の変遷」で女性観の変遷を3期に分けた。第1期は、文明開化が叫ばれ、西洋思想や制度が紹介された時期で、西洋婦人に驚き目を見張った時代である。第2期は欧化政策の下で西洋風が一般に広くもてはやされた時代で、女性が髪を切り、洋装になり、女学校ができた。明治の新国家がその体制を整えた第3期には、欧米のフェミニズムが入り、女性の権利拡張や男女同権、自由結婚を標榜し、言論界を賑わわせた。しかし、極端な欧化主義は当然保守反動となり、日本的な思考や制度をいかに時代に合わせるかが課題となる。その結果として生まれたのが、良妻賢母という女性観であったと湛山は説明した。「良妻賢母主義というのは、欧化主義に対する反動的保守主義の結果であるが、・・・必要上起こりたる実用的の主義である」[19]と論じ、西洋流の個人主義思想や自由競争主義が産業界のある一方で、家族制度は旧来のまま残り、女性を家庭から解放するに至らず、結果として、「良妻賢母なる折衷主義」が現れたとする。湛山は、この良妻賢母主義は時代遅れであり、家

18 姜、前掲、48頁。
19『全集』第1巻、300頁

庭は女性の唯一の生活保障の場ではなく、妻となり母となることが唯一無二の職業ではないと述べた。これは当時の一般的な女性観からは革命的である。

湛山が良妻賢母主義教育を推進するとして批判したのが、御用学者であり教育者として第１人者とされていた吉田熊次[20]である。①では、吉田が『女子研究』で明らかにしている女子観の古さを指摘、吉田の「女子を一般の原則としては妻なるべきものだと決定した」との言説を批判する。さらに吉田のいう「家族的国家主義」も女性にとって差別的で、女性の「個人」を認めていない点を時代錯誤であると批判した。吉田が家庭内の男女の差別を肯定し、「・・・男子を主とするか女子を主とするかは第二の問題と致しましても、家庭生活は男女両性の合同生活であると云う以上は其者の孰れかが主となり、孰れかが従と云ふことでなければ決して合同生活を全うすることは出来ぬのであります」と男女の性差にこだわる立場に強く反発している。家族制度も時代とともに変化が必然であって、吉田が社会の実情を無視していると鋭く批判した。湛山は、歴史的社会的変化によって女性の置かれた立場を改善すべきだとする。女性も男子と同様に「個人」して自立できることが要請される時代だというのである。湛山は、以下のように吉田を批判している。

> 今日は封建階級の制が破れて、家に家禄稼業の附属せるものなく、各個人は自由競争の中にその生計を立てねばならぬこととなった。男子の既に生活上の保障なし、しからば如何にしてこの男子を独り当てとしてその妻たり母たることを以て唯一無二の職業としておることが出来よう・・・近年における職業婦人の増加という一事によっても明らかなる処である。・・・良妻賢母主義は・・・まったく過渡期の産物であって、決して今日においてもなお採用せらるべき有用な主義ではない。今日に於いては婦人をこの桎梏から放ってやらねばならぬ・・・自由競争の社会に立って押しも押されもせぬ一個の人として生存していけるようにしてやらねばならぬ[21]。

また、③で女子教育者として活躍していた棚橋絢子[22]に対しても鋭い批判をしている。棚橋が「女は従順で優美なのがよろしい、少し恥らって顔を赤らめるのがかわいい」と述べたのを批判し、「これでも教育者か」とその舌鋒は鋭い。③で、湛山は以下のように言う。

> しかし兎に角一部からはえらい女子教育家のように思われている棚橋絢子氏が斯んなことを言うてるとは、日本の婦人界も随分心細いはなしであるのみならず、その悪感化や実に恐るべきのもがある。

---

20 吉田熊次（1874～1964）、東京帝国大学教育学研究室の基礎を築いた。明治 37 年から東京女子高等師範学校教授と東京師範学校教授を兼任。教育政策の立案に参画した。（『日本近現代人名辞典』吉川弘文館）

21『全集』第１巻、300 頁。

22 棚橋絢子（1839～1939）明治から昭和初期にかけての女子教育家。東京高等女学校などで、修身、倫理などを講じ、賢母良妻の道を具体的に説いた。（『日本近現代人名辞典』吉川弘文館）

湛山は、良妻賢母教育を標榜する教育者たちが、女性たちを家庭に押し留め、社会的な活動から疎外している事実をあげて相変わらず「男子の奴隷」たらしめているとして女子教育の方針転換を訴えた。「浅薄なる良妻賢母主義の教育を捨て」婦人を解放して社会的に活躍させるべきとの主張であった。

（2）『青鞜』と「新しい女」について

①「7月の雑誌の婦人論」大正元年8月『東洋時論』（『全集』第1巻、290）

②「評論と感想」明治45年2月『東洋時論』（同、191）

③「新しき女」大正元年9月『東洋経済新報』（同、497）

イプセンが須磨子のノラで評判になった同年（1911年）、平塚雷鳥の雑誌『青鞜』が創刊された。湛山は、②の中で「『青鞜』という雑誌は自分の常に注意を怠らない雑誌である」[23]とその出版以来世論を沸かせた女性誌に注目している。雷鳥の意図した『青鞜』は当初、「女流文学の発達をはかり、各自天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を生む事を目的とす」とあるように、文芸雑誌であったが、創刊号の大胆な装丁、雷鳥の「元始、女性は太陽であった」という創刊の辞や、与謝野晶子の詩で衆目の的となった。自我意識に目覚め始めた女性たちが、本音を語る「場」となっていくと、当局から危険視され、幾度も発禁処分を受けた。だが、ノルティ[24]が指摘するように、『青鞜』が、当時の社会に与えたインパクトの大きさは無視できない。一般誌である『太陽』『新日本』『中央公論』や新聞各紙も「婦人問題」を扱う記事が目立つようになったのは、『青鞜』のもたらした効果である。女性たちが、自身の結婚や恋愛、妊娠、出産、家族との確執をありのままに書き、投稿した。「家庭」や「性」といった禁句が口憚ることなく女性の言葉で語られるようになったことも、この『青鞜』後の変化である。湛山は、②で以下のように「新しい女」として行動し始めた女性を支持した。

> 我々新しい男子の真に心の友となって、手を携えて新時代を形成って行こう、
> 形成って行けるであろうと思われる婦人の殆どひとりも見出し得ない我が日本の婦人界に於いて、兎にも角にも、青鞜社員のような若い女の人々の、少数にしても起こってきたということは独り社会現象として我々の注目すべきことであるばかりでなく、また我々新人の深く喜びと感ぜざるを得ない処である[25]。

若い男女が対等の立場に立つことの利点をあげ、共に新しい社会を創造することを理想とした。しかし、自己主張を始めた女性たちの行動が三面記事で揶揄されると、面白半分で騒ぐ世論を批判する一方で、破廉恥との非難を「聞く処ある」と羽目を外した女性たちの自省を促す。以下、③から引用する。

23『全集』第1巻、191頁。
24 Nolte, 前掲、93頁。
25『全集』第1巻、191頁。

もし、果たして、こんな者が所謂「新しい女」であるとすれば、それは実に価値の無いものである。・・・唯だ男のなせる放縦の生活を真似ようとして起こったものに過ぎぬとすれば、・・・そこらあたりとうろついている不良少年を一寸真似て起こった不良少女に毛の生えたくらいのものかも知れぬ。以て、太平の徴、文明爛熟の象とはすべきも、明治時代、大正時代の誇りとするに足る産物ではないことは確かである[26]。

彼女たちの行動は、男性に経済的に依存したままであることに気づかずにいるのは、時代遅れであり、男性からの生活の保障を当然の権利と考えているようでは「新しい女」であるはずがない、とその行き過ぎをたしなめている。そのうえで、

文部省や老教育家が一生懸命になって教えた良妻賢母主義、すなわち、何でも独立自活してはいかぬ、飽くまで夫や親に喰わせて貰えと教ゆる主義が、その結果としてこの放縦なる女子を産んだ

といい、原因を政府や権威ある識者の固執する良妻賢母主義とその教育だと主張した。女性たちが「相変わらず、夫や、父や、兄やの収入の下に遊食し、何等自ら働き自ら生来るという必要も義務も感じておらない。・・・これは新しい女ではなく旧い女である」[27]、と指摘した。

湛山は、良妻賢母は生活を担保された経済的にゆとりがある婦人にのみ許されるのであって、いわゆる良家の女性が「職業婦人たることを以て何等か自己の品位の下落であるかの如く考え、出来るだけ遊食の途を探さんとしている」のはまさに良妻賢母教育の弊害であると述べる。しかし、その一方で、「新しい女」を主張する女性たちについても、生活者の視点が欠けていて、ただ単に、良妻賢母の教育に飽き足らず、目新しさをもとめ、放縦な生活をしているに過ぎないと批判した。

（3）女性と職業

①「婦人の位置の移動」明治 45 年 7 月『東洋時論』（『全集』第 1 巻、281）
②「近代に於ける婦人問題の中核」[28]　大正 2 年 2 月『国家及び国家学』（『自由思想』100 号掲載）（『全集』未収）
③「恐るべき習慣の力」大正 2 年 12 月『東洋経済新報』（『全集』1、531～）
④「婦人と政治運動」[29]大正 4 年 5 月『早稲田文学』114 号「現代思潮」
⑤「婦人を社会的に活動せしめよ」大正 13 年 7 月『東洋経済新報』（『全集』5、35～）
⑥「婦人雑誌に現れたる本邦婦人の位置」明治 45 年 2 月『東洋時論』（同、1、255～）

湛山が『時論』で取り上げていたテーマの一つに、女性と職業の問題がある。それまでは家庭

26 同、498 頁。
27 同、499 頁。
28『全集』未収
29『全集』未収

だけが女性の幸福を約束する場であった。しかし、現実には維新以来の近代化を底辺で支えたのは、貧しい女性たちであったと言っても過言ではない。湛山は、①で女性労働者数の変化を統計で示し、その分析によって自説の論拠を明確にしている。

大正デモクラシー期には女性の職種が一層拡大し、工場労働の「女工」に対し、事務員やタイピスト、電話交換手などの職種に従事する女性を「職業婦人」と呼ぶようになった。都会では、いわゆるサラリーマンが登場し、その妻は「主婦」に専念する。都市中間層が拡大したことで、教育水準の高い女性たちが多様な生き方を求めた。「主婦」として家庭を守る女性でも、内面に自己実現の欲求を意識すると、家庭と職業の両立が難しくなる。職業婦人は、家庭との両立に行き詰まり離婚に至るケースが出てきた。当時、音楽家として人気があった柴田環女史の離婚もその一つで、世間で騒がれた。湛山は「家庭は離婚の素因にはならない」として両立が可能との立場をとる。

姜によれば、職業と婦人についての見解を「職業婦人論」として論じたのは、湛山の功績だと認め、こう指摘している。

> 職業婦人の問題は、婦人解放を一つのメインテーマとして掲げた『時論』の創刊当初から、責任編集者の三浦銕太郎によって注目された。・・・権利論と教育論を中心としたありふれた論調を職業婦人論というユニークなものに転換させたのは 1912 年以降のことで、主に三浦と湛山の功績であった[30]。

明治以来、女性が家の外で働くことが社会的に一段下に見られていた。現実には働らかなければならない女性は多かったのであり、そこに目を向けて、女性が働くのは「時代の必然である、経済的自立すべし」と湛山は主張した。湛山の視点は観念的なものでなく、現実重視の立場である。湛山は、現実に気づき始めた女性の行動を支持し、さらに論拠を世界の思潮に求める。湛山は、女性の変化を時代の進化と捉えた。

②の評論は、湛山の「婦人論」の核心的なもので、彼の婦人問題に対する基本な視点が述べられている。「婦人論」として重要、かつ、その評論の手法において湛山らしさがよく出ているものである。

湛山は、職業婦人の増加が世界の趨勢だと述べる。ヨーロッパで広がりを見せていたマルクス主義、ことにドイツ社会主義運動の先鋒として知られた、ベーベル[31]の『女性と社会主義』から影響を受けた。湛山は、東洋新報社に入社した当初から、社会主義者の片山潜と知己を得ている。日本でも、社会主義が当局から次第に危険視され、圧力をかけられる時代となって行くが、湛山は社会主義に理解を示す。しかし、ドイツ社会主義が「経済的平等という一事だけを極端に主張するのは唯物論の欠点」[32]と指摘もしている。日本で盛んになった女性論を、世界史的な視野に

---

30 姜克実『石橋湛山の思想史的研究』早稲田大学出版部、1992、43〜46 頁。

31 アウグスト・ベーベル（August Beber）1840〜1913、ドイツ社会民主党党首。ドイツ軍国主義政策に反対。女性の社会的解放を主張した。

おいて論じているところに湛山の独自性がある。

昭和女子大学の伊藤セツの研究[33]では、ベーベルの『女性と社会主義』は19世紀後半から20世紀の初頭に世界的に広く知られていた。伊藤は、日本でベーベルの名が知られ始めたのは1903年からとする。この年の『平民新聞』11月15日号にベーベルの顔のスケッチが載った。翌年1904年のアムステルダムで開催された第2インターナショナル大会に参加した、片山潜がベーベルの演説内容を『平民新聞』に書いた。女性解放論者として、理論家として活躍する山川菊枝（1890〜1981）も、このベーベルの『女性と社会主義』を翻訳[34]した一人である。ベーベルは、その著書で①女性労働者の増加は社会的変化の所産であり、かつ社会は根本的な変化に向かっている。②婦人の地位の変遷は明らかである。③婦人の地位の発達に関する世俗の思想は甚だしく誤っている。④婦人運動は婦人自身の中でさえ、闘わなければならない。偏見は社会だけのものではない、その多くが女性の地位に関する無知[35]に原因がある。⑤婦人問題は人間社会の労働者の地位に関する労働問題と同じ。⑥多くの職業において、女性たちが体力以上の労働を強要され、わずかな生活費の為に生涯を奴隷として供さなければならない。⑦婦人も男子と同じく、自由のため、生活を享受するためには経済的に独立しなければならない。⑧労働においても、教育においても、男女の機会均衡と自由競争を認め、大学への女性の受け入れを認め、官職に就くべき、男子と同じ法律的な権利を与えるべきと、序論の要旨で述べた。

ベーベルは、女性や労働者の置かれた現実を、膨大な統計をもとに分析した。ベーベルの主張は社会制度が産業構造の変化にともなって変化し、結婚のみが女性の幸福をもたらすものでないこと、男性も賃金労働者となり、家業に頼る生活が成り立たなくなったこと、戦争により極端に男性の数が減少したこと、男性の側にも結婚が遅れるか、妻帯ができる十分な条件が失われた現状を統計を挙げて詳細に分析し、その骨子をまとめたのが『女性と社会主義』である。伊藤は、「その人口論はジェンダー統計の先駆的なもの」で、「資本主義の矛盾を明らかにすることを意図しただけでなく、女性とその生殖力にも注目している」[36]点など評価する。

湛山の②「近代の婦人問題の中核」は、このベーベルの理論に同調する論文である。

統計を駆使するのが、湛山の評論で特質とするなら、⑥の評論は、婦人雑誌の分析から当時の女性心理を描き出したもので注目すべき「婦人論」である。

湛山は、当時刊行された婦人雑誌を分析し、女性の「関心の所在」から婦人問題の核心をついた。ことに、湛山は職業への偏見を指摘する。維新後の明治初期には、知識人の多くが、男女同権を天賦人権として認め、女性の社会での活躍を容認したが、同時に女性間の階級的格差を助長した。

32『全集』第1巻、57頁。
33 伊藤セツ：「ベーベルの女性論再考」『昭和女子大学女性文化研究叢書4』お茶の水書房、2004
34 山川菊枝、『婦人論』第34版、
35 婦人の地位は「一定不変で将来においても変わりなく、自然は婦人を妻及び母として、その活動を家庭に限定すべく運命づけた」。「妻及び母は天職＝natural calling」というが、そういう論者はこの「天職」として尽くすべき地位に置かれていない幾百万の女性の存在を無視している。
36 伊藤、前掲書、134頁。

近代化の過程で、貧しい女工や、海外売春婦に依存していた事情もある。結婚し、家庭に入るのは限られた一部の女性であって、貧困層と富裕層との女性間格差は大きかった。

大正デモクラシー期に登場した都会の「職業婦人」も、「主婦」も、女性の大半を占めていた低賃金労働者との差は大きかった。世間一般の女性の職業への意識は、差別観や偏見に捉われ、変化がみられない。湛山が注目したのが婦人雑誌で、そこから女性の「心理」を読み解こうとした。大正期には数多くの婦人雑誌が出版されている。そこに描かれた「理想の女性像」からは、「職業女性」への偏見が依然としてあること、女性たちが「働く」女性への差別意識をもっていることを指摘した。湛山は、9種類の婦人雑誌に取り上げられた記事を分類し、内容ごとの統計を取っている。読者である女性たちの興味や関心の所在を突き止めるためであった。

跡見学園創始者の跡見花蹊は、「婦人職業論」[37]で「・・・下等婦人に職業ありて、上中種族に職業なし・・世の論者は上流婦人の議論を以て中以下に及ぼさんとす、・・・下等婦人の職業を推してこれを上中種族に拡充せんとするなり」と、職業を持つことを否定した。また、同様に、武田柳香も、「婦人の職業」[38]を「手工、女教師、保母、看護婦、産婆、書記」が相応しいと述べた。湛山は、これらの古い職業観に女性自身が、今なお捉われたままであると、⑥「婦人雑誌に現れたる本邦婦人の位置」に書いたのである。

明治後半から、大正期には多くの新しい婦人雑誌が登場し、読者を広げた。湛山が取り上げたのは、『新婦人』『新女学』『女学世界』『淑女かがみ』『婦人世界』『婦人くらぶ』『婦人の友』『女子文壇』『婦人画報』の9冊でそれらを詳細に分析した。当時の婦人雑誌の多さは以外なほどで、また、それを求める読書層があった事実からもこの時期の女性論の隆盛が推察できる。湛山の手法は、婦人雑誌の分析を通して時代の求める女性像を掴み、女性の社会での位置を規定した[39]。彼は、「婦人雑誌とは」と問い、「若い家庭の主婦若しくは主婦たらんとするものの為に作られたる雑誌」と定義している。次に、「なぜ、男性誌なる者が存在しないか」と考える。湛山は、「婦人雑誌とは、婦人の職業の専門誌である」、男性が職業に関係した専門誌を求めるように、女性たちは如何に「主婦」なるかを婦人雑誌に期待していたと結論づけた。

湛山は、職業へのうしろめたさが、とりもなおさず、妻の座を理想的に描き続けることで読者を得ているのが婦人雑誌の実態であることを示した。「働かざるを得ない」女性たちも、理想は「妻の座」であった。湛山は婦人雑誌の内容を分類し、詳細な統計を取っている。その結果、記事の内容が良妻賢母に帰着しているのは、女性の社会認知がそこにあることに外ならず、湛山は、「婦人雑誌を見るに、我が国の女子が今如何に幸福な（酔生夢死し得るという意味に於いて）位置にあるかということが判る」[40]と書いていたのである。また、雑誌の写真や口絵を分類し、「大半が着飾った大家の夫人や名門の令嬢の写真」で、最も少ないのが工場の写真だと指摘する。湛山は、こうした分析から、①「女性にとっては社会や労働といったことは無縁で知る必要のないこと」、②「唯、着物や化粧のことばかり考えて居れば済む」と読める、と批判した。これらの

37 跡見花蹊「婦人職業論」『貴方之友』38号、東京教育社、明治21年、（復刻版第5巻、柏書房、2007）
38 武田柳香「婦人の職業」『貴方の友』29号、（復刻版、柏書房、2007）
39『全集』第1巻、255頁。
40 同、258頁。

雑誌の執筆者が男女同数であるとも指摘し、これも統計を並べて主な記事を書いたのが男性記者であることも明らかにした。。つまり、湛山は、当時の社会常識では、女性の理想は、職業の有無を問わず「主婦」であり、誰もが期待し、期待された地位とは「生活の基礎＝良妻賢母＝主婦」であったと示した。

湛山の婦人論は、進歩的であったと同時に人間心理に触れる。女性が職業を持つことは時代の流れで、社会の進歩の所産であるが、それを認識しようとしない女性の「意識」、潜在的な女性「心理」が、現実から目を背けていると指摘したのである。

（4）女子教育と個人主義

①「イプセンの『人形の家』と近代思想の中心」明治 45 年 2 月『東洋時論』(『全集』1、40)
②「評論と感想」明治 45 年 1 月『東洋時論』(同、186)
③「マグダを見た印象」明治 45 年 6 月『東洋時論』(同、220)
④「利己主義の福音」大正 2 年 12 月『東洋経済新報』(同、533)
⑤「晶子氏の『鏡心燈語』」大正 4 年 9 月『早稲田文学』118 号「現代思潮」(100 頁)
⑥「改造は心から」大正 10 年 1 月『東洋経済新報』(4、433)

女性が家政における高い自立性を与えられて、「主婦＝職業」として社会的認知を得るようになるのは、なによりも女子教育が良妻賢母をその目標とした結果でもある。しかし、上野千鶴子は、「主婦」という語が登場したのは明治 20 年代に「主人」の対語として出たもので、家庭の「主婦」としての女性の役割も開化の輸入思想と説明している[41]。女性の理想としての「主婦」が強調されていく過程には、国家の意図的な女性に対する差別的政策があった。

女性史研究の石月静恵は「明治初期の女子教育は学制と女子留学生に示されたように欧化主義とアメリカ女子教育の影響を受けており、後には見られないほど開明的な性格を有していた」[42]と述べる。しかし、1879 年の教育令は、女子教育の面では 1872 年の学制から大きく後退し、男女別学を原則とし、「女子の為には、裁縫等の科を置くべし」と女子のみ実学を勧め、「凡学校に於いては男女教場を同じくすることを得ず」(教育令　第 3 条) と掲げた。男女の別学が定められたことにより女子の教育の機会は急速に失われた。石月は、「教育令と同年の 1879 年、男子の中学校に在学していた女子は 2747 名であったが、男女別学が定められると、どの数は 1880 年 389 名、1881 年 210 名、1882 年 79 名、1883 年 7 名と減少し、翌 1884 年には女子はいなくなった」[43]との研究を紹介している。

文明開化期の『明六雑誌』以来、啓蒙思想家たちが女子教育を論じ、その重要性を説いた。巌本善治らによる『女学雑誌』(1885 年創刊) はキリスト教精神に基づき、女性の地位向上を目指し、そこからは多くの女性文学者が育った。そのほか、徳富蘇峰の『国民之友』(1887 年創刊) の姉妹誌、堺利彦の『家庭雑誌』もある。堺が『万朝報』在社時代に社会主義を家庭に適用する

41 上野千鶴子「近代家族の成立を終焉」自主ゼミ
42 石月静恵『近代日本史講義』世界思潮社、2007、28 頁。
43 同、29 頁。

目的で書いたものである。しかし、羽仁もと子によって創刊された『家庭之友』(1903年創刊、5年後、『婦人之友』と改称）は、家庭生活の合理化や料理、育児、衣服、などで「主婦」の啓蒙を目的に書かれ広く読まれる。これは、「主婦＝家政のプロ」という社会的認知の証明であるが、良妻賢母を強調する保守的な教育論の反映と読めてしまう。

こうした「反動的」な女性観からの解放は容易ではない、との認識が湛山にある。湛山は、繰り返し「意識」改革の必要を訴えた。いかに女性の解放を果たすかが、湛山の主眼である。「主婦」という社会的地位があっても、「家」に従属するのではなく、「個」としていかに生きるべきかを書いた。

湛山は、当時、世間で話題となり多くの女性たち魅かれた「イプセンのノラ」について論評し、「家」を出る意味を述べたのが②である。

当時「イプセンの『人形の家』」が評判となり、主人公ノラに憧れる多くの女性たちがいた。明治20年代に紹介された自然主義の文学は、女性の姿をありのままに描くことを目指した。自然主義の影響は大きく、文学や演劇で女性の現実が対象化され、女性の自我の解放へとつながっていった。

日本研究者でアメリカ人のシャロン・ノルティによれば、1911年（明治44年）は近代日本のリベラリズム運動のひとつの画期的な年であると指摘する[44]。それは、島村抱月が松井須磨子をノラ役に抜擢して、イプセンの『人形の家』を上演した年であり、平塚雷鳥（明子）が女性だけの手による雑誌『青鞜』を発刊した年であったからだ。共に、世間の注目をあつめ、議論を沸かせた出来事であった。自然主義に関して、湛山は早稲田大学学生時代に、美学を教えていた抱月と出会い、親交を深めた。抱月とは個人的な付き合いをし、好意的であることが『回想』[45]から読み取れる。文学者としてだけでなく、演劇を主宰する島村抱月は時代の寵児であった。因習打破や女性解放などの問題意識を湛山と共有し、共に時代批判をした。

湛山は、抱月や彼の文芸協会への関心も高く、文芸評論に観劇後の感想を書いている。自然主義者・文学者・演劇人の抱月は、湛山の師であり、改革者として同志であった。しかし、自然主義について湛山は独自の評価をする。自然主義が実生活の過酷さを描き、抱月のいう「第一義に対する要求の叫び」であるが、その意義を認めた上で、湛山は「その要求を充足するに足るべき方法は、他にこれをもとめねばならぬ」と、自然主義の限界を指摘した。彼は、個人の幸福も「社会的要素」を無視してはあり得えず、社会の制約と個人の欲求との折り合いを模索する「生き方」を「近代的個人主義」というのである。彼によれば、個人の解放も「社会的な要素」を無視しては成り立たず、社会と個人の関係性を踏まえての個人主義が「近代」の個人主義であり、それが近代精神である。イプセンの意図したのは、主人公ノラを通じて近代精神としての「個人」の在り方であった。ノラの行動を単なる現実逃避とした抱月の解釈はイプセンの意図に至らず、

---

44 Nolte, S. *Liberaism in Modern Japan*, p.107

45 湛山は早稲田大学在学当時、島村抱月から美学の講義を受けたことが『回想』（島村抱月と田中穂積　43〜45頁）に書かれている。その中で、島村抱月先生は「東京毎日新聞記者に採用、その後に東洋経済新報に記者になる機縁をなした・・・結果において同氏（島村、筆者注）は私を経済記者にしたのであった」と述べ、さらに、島村抱月の「面倒見がよい」先生として慕い、「先生は、この芸術座を起こして、家庭をも捨て、早稲田大学とも絶縁し、新劇運動に全身を打ちこまれたが、大正7年11月、当時全国に猛威をふるったスペイン風邪に冒されて急に死去された。さびしい最後であった」と書いている。

と湛山は批判した[46]。湛山は、②の中で「個人主義」を以下のように説明した。

> 即ち近代の個人主義は巧みにそれに社会的要素を取り入れたということが、特色である。私はここだと思う。イプセンにしても、また、その他の作家にしても、勿論中に違った行き方のもあるではあろうが、大体私は個人と社会との調和、更に一歩突っ込んで言うならば、社会を個人の中に取り入れて、而して社会的制約を意味ある者に生かして行こうとの考えの多分に潜んでおることをみるのである。

湛山は、「家」を捨てることが解放なのではなく、社会生活の中でいかに「個」としての自由を実現できるかを課題としたのである。

⑤では、与謝野晶子が「個人主義」を理解した女性として高く評価している。以下、『早稲田文学』に湛山が書いた記事である。

> 与謝野晶子氏の『鏡心燈語』を見落とすと云ふことはない。浮田博士の社説、内田魯庵氏の漫筆、そんなものは見る気もしないことが多くても、晶子氏のは必ず見る。・・・男の中で、僕は今晶子氏ほどの説を立てる人を余り発見しない。・・・晶子氏は自由思想家である・・・

与謝野晶子は、歌人として既に著名であった。大正期には婦人評論家として第一線で活躍していた。「婦人改造の基礎的考察」と題した論文[47]は、1919年の『改造』に掲載されたものだが、女性の生き方を何より先ず、個人として自覚的に生きることだと主張し、さらに、「ただ問題はいかに改造すればよいかという点からはじまります」と具体的に提言する。当時、平塚雷鳥や山田わかとの母性主義論争で、女性の「母性」「母性的行為」のみを美点として強調することに強く異論を述べた[48]。母性中心主義主張する者に対して、「田を植え付けるときにも、試験管を覗くときにも、良妻賢母の意識をはっきりともたねばならないのでしょうか」と、晶子は母性強調に反論した。

人間の「個」を制限するあらゆる主義や思考からの解放を訴えたのが、晶子であった。良妻賢母主義も、女性の資質を限定的に捉え「個」の抑圧であると批判した。さらに、「男女、貧富、貴賤、黄色人と白皙人といった差別をこえた」ものが、女性の「改造」の基礎条件である、とも述べる。晶子は、「男女平等主義と人類無階級的連帯責任主義の上に立って、私たち女子も男子

46「・・・この結果（ノラの家出：筆者注）を生んだものは、全く近代思想の特色である現実改造という思想である・・・イプセンが主張した個人主義はやはりこの現実改造を目的とした個人主義であった、決して、その妻として、母としての社会的関係を離脱することを終局の目的におかなかった」『全集』第1巻、47頁。

47 与謝野晶子「婦人改造の基礎的考察」小田切秀雄『個の自覚』13、社会評論社、1990、135〜148頁。

48 晶子は、「文筆を透して実現する私の生活の上には、決して家庭を主としてはいません・・・家庭も、国家も、その他の何ごとも、その時の重点となっている人類生活を取り囲んで有機的に繋がっているのです。・・・言葉を変えていえば、人間は母性と母性的行為とがその全部ではなく、母性と交渉しない無限の性能があり、それらの性能が発展した無限の種類の行為があるからです。（「婦人改造の基礎的考察」『改造』（1919）に掲載）

と等しく教育の自由、参政の自由、職業の自由等、人間の文化生活に必要なかぎりのすべての自由を要求します」[49]と『改造』で明言する。それは、湛山や王堂の「徹底個人主義」[50]に通底するものであった。

（５）結婚、離婚、家庭生活

①「この花の装いよ」「肉か愛か」「虚栄の罪にあらず」明治 45 年 4 月『東洋時論』（『全集』１、264）

②「破られたる女とはなにか」「結婚の費用」「唯だ嫁入り支度できぬために」「男子の思想改造」明治 45 年 5 月『東洋時論』（同、269）

③「結婚に関する疑義」「尚一つの例」「貞操とはなんぞや」「我が国における貞操の定義」「愛情結婚を理想とせよ」「結婚と子孫」明治 45 年 6 月『東洋時論』（同、273）

④「糟糠の妻の嘆き（１）」明治 45 年 7 月『東洋時論』（同、285）

⑤「糟糠の妻の嘆き（２）」大正元年 9 月『東洋時論』（同、292）

⑥「虚栄と結婚費用」明治 45 年 4 月「社会」（同、452）

⑦「家族博覧会を見る」大正 4 年 5 月『東洋経済新報』

⑧「家族生活にまして民本的なるは無し」大正 6 年 8 月（『全集』２、494）

⑨「白蓮夫人の家出」大正 10 年 10 月『東洋経済新報』（同、４、486）

湛山は、当時の女性にとって切実な現実として結婚問題を取り上げた。その中で、具体的にいかに「個」としての生き方を示す。④⑤「糟糠の妻の嘆き」[51]では、妻が夫のために犠牲的な生活をすることは無意味だといい、美徳とされた自己犠牲の不合理を説明する。妻も夫たるものも互いに自己を見つめ、絶えず修養を心がけること、人間として成長することが重要だと述べる。女性が信念を持って生きることを良しとしない男性に向かって、「意志の強い、役に立つ、独立自営の婦人が出てくれば、足でまといが少なくなって都合がよろしくありませんか」と、男性の意識改革を進言する。

①④では貞操論争や親の決めた結婚、離婚が、当時の女性を必要以上に追い詰めていた事実にふれて、「貞操は愛であり愛を持続することが貞操を保つこと」であると、愛情が心の問題であることを教えた。②は、結婚に費用を掛けることについて「下らない虚礼虚栄がいかに害毒を流し、不幸を隠すか」考えよと諫めている。湛山は、旧来の社会通念を批判している。女性が人として自由な生き方を目指し、また、その行動に自信を持つよう導いている。

⑦では、家庭生活の理想を国家に敷衍して、国家主義的な方向へ進もうとする日本の現実に警鐘をならしたものである。

湛山は、切迫した国家の現状を危惧し、家族の在り方について擬えて、『東洋経済新報』の社説を書いた。「家族生活に増して民本的なるは無し」と題され、家族がそれぞれに「個人格」を

---

49 晶子、同上。

50 晶子は、「女子の改造が・・・文化的価値創造の生活に参加する意味からいえば徹底個人主義である」と言う。

51『時論』明治 45 年 7 月と大正元年 9 月。

発展させる必要性を強調した。これは、次第に家族と国家が結びつけられ、その統制下に組み込まれる風潮を看破したものである。平易な喩で家庭の在り方を論じているが、この社説が書かれた前年、日本はドイツに参戦し、この年の 11 月には中国袁世凱政府に対して 21 か条の要求をした。湛山は、社説の冒頭、戦争がその性格を変え「国民全体の生命財産を力とし、茲に初めて之を遂行し得るものである」と総力戦になったことを明確にした。総力戦を戦う国家にとって、家族が民主主義的であるのは不都合である。

国が「日本の社会は元来、家長を中心とし、その命に従って動く家族制度の下に成立てるものなるに、外国からの風潮にかぶれ、古来の美俗を捨てて、暴民主義を輸入するがごときは断じて許さん」というのは、民主主義を否定する動きであると、湛山は、「社説」で重大な危惧を表明したのである。

⑨は、有名夫人の大胆な行為として話題になった事件を取り上げて評論にかいたものである。「結婚」が不当に女性の差別であってはならないとして、また、世間体を気にする慣習も女性を不幸にすると書いた。家庭生活を「冷静」に見つめる視点がある。

（6）その他

「女学生の反乱」明治 44 年 7 月『東洋時論』（『全集』 1 、173）
「女子の大学入学・電燈購買同盟」大正 2 年 9 月『東洋経済新報』（同、514）
「先ず女子教育の改革を」大正 4 年 6 月『早稲田文学』116 号「現代思潮」
「婦人を社会的に活動せしめよ」大正 13 年 7 月『東洋経済新報』

4．総括―湛山の婦人論と個人主義の哲学

湛山は、1920 年代を中心に大正デモクラットとして婦人論を書いた。彼の婦人論は、他の評論と同様に、湛山の個人主義の哲学が根底にある。本稿で見たように、湛山は幼児期から独立心と自立心が培われ、精神的自由を尊重する姿勢を貫いた。宗教についても、10 代で得度しているが、決して偏狭な信仰心ではない。日蓮宗であれキリスト教であれ、人間を尊重する精神性に彼の評論の特徴がある。湛山は中学当時から社会への関心が強く、権威主義や偏見、差別に対して鋭く反応している。封建的な制度や慣習に捉われた弱者としての女性へ視線を向けたのも自然であった。

湛山の言論活動の場であった東洋経済新報社が、大正デモクラシー期の自由主義の牙城であったことも、湛山の婦人論を読むうえで重要である。湛山をはじめとする自由主義者は、日本社会の改革を目指した。湛山が婦人論を書いたのは、開化以来の近代化政策で日本が一応近代国家の体制を達成したと自負する時代である。しかし、同時に、大衆のなかにも、特に知識層の若者たちの間には、その矛盾や社会的不公平感が鬱積していた。日清戦争の勝利に自信をつけ、やがて日露戦争、第一次世界大戦へと帝国主義路線を邁進する国家に対して、大衆の意識は高まり、自由主義者や社会主義者が反論した時代背景がある。帝国主義の矛盾は日本だけのものではなく、ヨーロッパの問題でもあった。封建的な女性への差別と帝国主義への批判を、湛山はその婦人論で意識している。ドイツのベーベルの社会主義に理解を示したことも、湛山の婦人論に反映していることからも彼の評論の独自性がみられた。

封建的は因習から女性を解放するために、何より重要としたのは、女子教育の改善である。当時の教育界の権威であった吉田熊次や棚橋絢子を批判する。維新直後、西洋化の流れで女子にも高等教育への門戸が開かれるが、富国強兵を標榜するとき、女子教育は反動期を経験していた。それが湛山のいう良妻賢母主義の欺瞞であり、女性差別であると指摘したのである。日本の資本主義を底辺で担ってきた女工たちの実情が明らかになったのもこの時代であり、女子労働者へ差別ない視線を向けた湛山がいた。女性の地位の変化を明らかにしたのは、近代化の陰で立ち遅れた意識の問題もある。女性が職業を持ち、家の外で働くことへの偏見は強かった。女性間にも階層意識への拘りがあった。湛山が、中学当時、大島校長を通じてクラーク博士の理念を教えられ、「職業に貴賤なし」「職業倫理の実現」を使命にした。社会の一員として働ける女性を理想として、女性の経済的自立と家制度からの解放、精神的自立の重要性を説いた。

女性自身による差別からの解放は、平塚雷鳥の雑誌『青鞜』の創刊で社会現象となっていた。雷鳥に共鳴する女性は、「新しい女」として注目される。家制度で抑圧されてきた女性たちが、自分の言葉で語るようになった時代である。自然主義文学の浸透による演劇界で話題をさらったのは、イプセンの『人形の家』であった。松井須磨子の演じたノラは評判となり、女性たちの憧れとなる。湛山は、こうした女性たちの変化も注目している。女性の行動を単なる一時的な流行ととらえるのではなく、歴史の必然であり、それに添って社会が変化すべき時だと分析した。「新しい女」たちに対しても、経済的自立と社会的責任を強調する。湛山の本意はあくまでも、民主的、自由な社会の創造であった。女性も男性も等しく社会の成員として活躍することが理想であり、そのための意識改革を訴えている。

婦人雑誌を分析し、そこから女性たちの本音を読み取った。女性らしさへのこだわりは、女性にとって無意識の難題であろう。また、雷鳥と与謝野晶子が「母性」をめぐって論争、対立したように、母子関係も女性にとって多様な議論となる。湛山が与謝野を評価するのは、彼女の強さであった。家庭や子供を方便とせず、社会人としての仕事を果たす姿勢に近代的な生き方を認めたのである。与謝野晶子は、『改造』のなかで、女性の生き方を「何よりも個人として自覚的に生きること」と言った。晶子は、女性も男性もなく、「個」として自立することの大切さを書いたのである。湛山と晶子の個人主義は共通している。晶子も何よりも個人として差別のない、自由な生き方を理想とした。教育や職業、社会参加での男女平等を訴えた。女性たちも男性と等しく政治へ参加することを当然とし、婦人参政権運動に賛同する。湛山も女性が政治の場でも活躍すべきとして参政権の運動を認めている。彼はまた、婦人参政権獲得に尽力した市川房枝との交流もあった。雷鳥、晶子、市川房枝と、時代のパイオニアとなった女性たちを、偏見のない視線で評価している。

湛山は、幼時期から親元を離れたことで独立心と自立を体得した。他者のなかで生活するためには、他者を認める必要がある。そこに湛山思想の原点があった。湛山の個人主義は、他者との共存の上に成り立つ。それは、自他を認める個人主義であり、普遍的な人間主義であった。社会の差別や偏見からの解放を、女性の問題に集約して論じ、民主的な社会の実現を目指したのが湛山の婦人論の核心である。

（受理日　5 月 11 日）
（掲載許可日　7 月 24 日）